

『津波てんでんこ ―近代日本の津波史―』

山下文男著／新日本出版社

私が三陸を訪れたのは、3・11から半年近く経った8月上旬のことである。峠を越えて下っていくと、あるところから下はいきなり何も無い。大震災の発災直後に道路を埋め尽くした瓦礫は既に撤去され、家の基礎は草むして、人の営みがあったことすら感じない無機質な風景が広がっている。鉄筋コンクリートの建物が幾つか残っている。その4階にまで、瓦礫が引っ掛かっている。あの高さまで津波が押し寄せたとは信じられない。高台に逃げればよいという。山が迫る女川町や南三陸町はまだ良い。陸前高田市は、三陸の湘南と呼ばれる平野が開けた地形だ。海沿いにいた人達が直ぐ逃げられる場所は見当たらない。鉄筋や鉄骨造りでも、並みの高さでは駄目。亡くなった方が多いのもむべなるかなと思った。



チリ地震津波の高さを示す
看板が虚しく傾いている。
南三陸町防災庁舎前にて

そんな陸前高田市の中で一人の犠牲者も出さなかった海沿いの集落がある。チリ地震津波でも浸水し、それを教訓に毎年地区で避難訓練をしていた。訓練だから決まった避難所に避難したが、誰もがそれでは助からないと知っていて、自宅のそばにそれぞれ逃げるべき高台を決めていたのだという。発災後、それぞれ決めた場所に逃げた。それでも駄目だった。迫り来る津波を逃れて、斜面をよじ登った。足の悪いおばあちゃんは、這って登ったと答えた。まさかのために、斜面を整備していたのかも知れないと思った。津波の高さは想定外だったが、想定した最初の避難と、想定外への対処で生き延びることが出来た。ところが、この集落より山手の集落で犠牲者が出ている。チリ地震津波もここまで来なかったから今回も大丈夫だろう、と思って避難が遅れた。災害は常に想定

外、その場で想定外にどう対処するかが生死を分ける。

テレビで根こそぎ津波で流されたのを見ると、海岸沿い全てがそうだと思ってしまいが、少し違う。石巻から女川町に至る道路の途中に、海岸沿いに家が無傷

で建っていて驚いた。万石浦と呼ばれる辺りである。湾の入り口が狭く、津波の侵入を防いだらしい。この地域は、今は地盤沈下が酷い。助かった家々が床下浸水を繰り返している。解決困難な災害が進行中で言葉も無い。海に近いところで建物が残っている光景は、気仙沼や石巻でも観た。海拔何mまでは津波には危険、と一概に言えないのが難しいと現地で気がつく。地形や津波の波形、震源との位置関係等々、様々な要因が絡むのだろう。

帰長して幾つか津波関係の本を読んだ。その中でもお薦めは「津波てんでんこ」である。著者の山下さん自身が、明治三陸津波で被災した集落に生まれ、昭和三陸津波の被災者でもある。明治、昭和、チリ地震の3回の三陸大津波の写真は、船が流され、亡骸があり、家がバラバラになった木材、家の礎石だけが残った様子、東日本大震災と何も変わらない。海沿いの集落の人は逃げたが、それより奥の集落の人が大丈夫だろうと思って逃げ遅れたのも今回の震災と変わらない。既視感を覚える。明治の時は地震の揺れが小さかったために避難を考えず被害を大きくしたが、昭和の時は海の様子を見て避難を呼びかけた村では死者が少なかったと書かれている。やはり、現代の気象庁の津波警報は避難のためには重要である。東日本大震災で、津波警報の高さの当初予測の誤りを指摘する声が多数聞かれるが、警報が無かったら、もっと多くの人が命を落としたであろう。

今回の震災後に注意すべきは、三陸は津波が多い＝三陸しか津波は起こらない、と考えてしまうことである。山下さんは、そのことにも強く警鐘を鳴らしている。関東大震災では三浦半島や伊豆半島、先の大戦末期の東南海地震では三重県、戦後間もなくの昭和南海地震では和歌山県や高知県が同じような大津波で甚大な被害を受けている。最近では北海道南西沖地震の奥尻島や、その前の日本海中部地震での秋田での被害と、日本海側も津波に無縁では無い。決して三陸だけのことでは無い。在学中も卒業後も、海で遊んだり、海に近いところに住む時は、とにかく大きな揺れを感じたら、津波警報のみに頼らず、上司の指示を待つことなく、自分の感覚を信じて、高台に避難して欲しい。避難までの過程はどうでもよい。命あって先の人生が開ける。

山下さんは、陸前高田市の病院で、首まで津波につかりながら、カーテンにし

がみついて奇跡的に助かった。残念ながら、昨年（2011年）12月に亡くなった。二度目の被災を経て、何を訴えたかったか、今や聞くすべは無い。これだけの犠牲者を出して、長らく津波の恐ろしさを訴え続けてきた氏にとっては、さぞかし無念であったろう。ご冥福をお祈りしたい。氏の想いは、大震災前に出版されたこの書に語り尽くされている様に思う。是非とも、被害の傷跡の残っているうちに三陸を訪れて欲しい。その上で、本書を読むことをお勧めしたい。

執筆者紹介

木村 悟隆

生物系准教授。専門領域は、高分子物性、天然由来分子の液晶形成挙動、高分子の固体NMR。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『津波てんでんこ：近代日本の津波史』 山下文男著 新日本出版社 2008年
1,680円

ブックガイド目次へ